

「挑戦と希望の地域支援・訪問看護ステーションと他機関との連携支援」
に参加して感じたこと！

自治労宮崎県本部障労連 長田 寛

訪問看護と言うと、1 人では病院に行くことのできない高齢者のお宅に看護師が出向いて処置をするようなイメージがありましたが、若くても精神疾患がある方のところにもこのサービスを利用できるということを知れて大変勉強になりました。

3事業者の方々の日々の活動事例をビデオで見せていただいて、それが綺麗事ではなく、でも具体的にどのように接しているのかを見ることができて、今後お願いする時に安心できると思いました。

パネルディスカッションでも、司会の方のうまい誘導もあり、パネラーの方々が、それぞれ本音で話していらっしゃることが伝わってきました。

公務の職場に勤めているものとして感じるのは、あまりにも財政を締め付けすぎており、必要とするところになかなかお金が回って行きづらいということです。

予算を確保しようとする大枠の予算は決まっているから、新たに何か事業をしようとする、既存事業の予算を削って持っていかなければならず、予算枠を超える場合は、予算のやりくりを財政当局にこと細かく熱意をもって合理的に説明できないとつけてもらえないなど、非常にハードルが高いものになっています。

その反面、何か大変な事態が起こると慌ててそこに予算をつけて、その場を取り繕うようなことを時々見かけます。

この辺については財政当局がどのような考え方をするかによっても大きく変わってくるのではないかと思います。地方自治体の予算は首長が調製し、議会に提案し議会の議決を経て成立するので、議会の場で現場の声を理解し発言できる者の数とそれを後押しするような市民の活動が予算確保への早道ではないかとも思いました。